

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號五第 卷一十五第

月一十年五十和昭

紀元二千六百年記念論文集

# シュピイトホフの景氣理論\*

青山秀夫

一旦成立した好況は何故挫折して不況に轉化せざるを得ないか。此の所謂景氣のくづれの問題 (Probleme der Erklärung des Zusammenbruchs der Hausse) が景氣理論に於て決定的重要性を有することは詳しく論ずるまでもない。過剰投資説と過少消費説とが正面から對立するのも此の問題についてである。

ところでシュピイトホフの景氣理論は過剰投資説の立場を最も組織的に展開したものとして知られてゐるが、彼の理論はツガンのそれと同じ系統に屬し、ツガンの理論を一層精密に展開したものと見られる。先づ第一の共通點は「販路の法則」にある。ツガンが古典學派の販路説とマルクスの資本蓄積論とをどう結び付け、販路説を如何なる形態に於て發展させたか、またシュピイトホフが此のツガンの展開をどう利用したか、これらの諸點については既に拙稿「販路説の過剰投資説への發展」(經濟論叢第五〇巻第五號)で詳しく論じたから、こゝでは繰返して論じない。次に第二の共通點はアフタリオンの所謂「貯蓄學説」にある。こゝに吾々が「貯蓄學説」と呼ぶ考へ方は如何なるものであるか、またツガンはそれをどう展開したか、また此の「貯蓄學説」がツガンに於てその販路説或は不比例説とどう矛盾してゐたか、これらの諸點もまた既に上記の論文で觸れるところがあつた。シュ

\* 景氣理論上過剰投資説と呼ばれる立場をとる學者のうちにあつてツガン、シュピイトホフ、ハイネクの三人は特に密接なる理論的連絡を持つてゐる。本稿は過剰投資説に於けるツガン分派<sup>1)</sup>と名付くべきものを根本的に論評せんことを試みる部をなすものと共につて、稿<sup>2)</sup>に於て、過剰消費説と過剰生産<sup>3)</sup>とシュピイトホフの景氣理論の批判<sup>4)</sup>と共

ピイトホフは此の「貯蓄學說」の考へ方を受繼いで、上記の難點を除去して、これを完成する。以上の二つの點、販路法則並びに貯蓄學說は景氣のくづれの説明の問題に對して原理的觀點をなすものである。此の二つの點でシュビイトホフがツガンと共通のものを持つ以上、シュビイトホフの理論を以てツガンのその發展と解することは、差支へないと考へられる。

ところでシュビイトホフの理論は極めて難解であると云はれてゐる。事實を記述した部分は別として、その理論的説明は實に晦澁である。如何に努力しても徹底した理解を得ることは絶望に近い。然し乍ら多少でも此の理解を深め、その正しい批判を準備する一つの道があるやうに思はれる。それはシュビイトホフの理論をツガンの理論と對照しながら理解して行くことである。今述べた通り、シュビイトホフの理論はツガンのその發展と見られる。さうしてツガンの理論はそれ程理解しにくいものではない。従つて、シュビイトホフはツガンの理論をどういふ方向に發展させたか、を考へると、シュビイトホフの着眼點或はその理論の根本特徴が大體残りなく把握得ることになる。こゝで私は此の道を選ばうと思ふ。此の目的からシュビイトホフの理論をツガンのそれと比較すると、ほゞ次のやうな特徴が擧げられる。

(一) ツガンも亦、理論的分析と事實の觀察とを出来るだけ調和させようとなつてゐる。然しその結果は如何にも密木細工の感じを與へる。彼の理論は此の目的に充分副つてゐない。此の二つのものを調和することは實際困難であるが、シュビイトホフはその學問的生涯を賭して此の統一を實現しようとする。このためには先づ、景氣理論は一體どんな構造をもつべきか、について方法的に反省を加へなければならぬ。ツガンでは此の點は不充分にしか考へられなかつた。ツガンでは、恐慌と不況と、また恐慌と過剰生産(景氣のくづれ)とは、それぞれ、區別されてゐないが、シュビイトホフはこれらをはつきり區別する。これ

てられる。

によつて問題は一層正しい形で提出されることとなる。更にまた、ツガンは問題を恐慌に求め、これを資本主義の經濟組織によつて説明しようとしたが、シュビイトホフは景氣の波動を問題とし、景氣のくづれ——それは恐慌と區別される——の原因は、景氣上昇の機構自身に求められねばならぬと考へた。景氣のくづれは景氣循環の一つの段階に他ならず、それはそれに先立つ段階の結果として理解されねばならぬと見たわけである。斯様にしてシュビイトホフでは景氣循環の問題は、ツガンとは比較にならないほど、近代的な形でもつて提出されたのである。然し乍ら、方法といふ問題について云ふと、シュビイトホフとツガンとに共通する他の重要な側面がある。それは、變動過程の分析に、マルクスの擴張再生産表式を用ひたといふ點である。ツガンは勿論、シュビイトホフすらもマルクスの表式或ひはそれに近い考へ方によつて變動過程を考へようとしてゐるのである。然し此の方法は、分析の武器として、粗雑である。少くともそれは近似的にしか妥當せず、此の限界を充分明かにしないときは、謬りを生ずる。私が先に明かにしたやうな、ツガン及びシュビイトホフの販路説の謬りの原因は恰度此の點にあると思はれる。

(二) シュビイトホフは今述べた觀點からして、上昇過程を詳しく調べた。ツガンでは上昇期の特徴である投資活動については不十分な研究しか行はれなかつたが、シュビイトホフは、上昇過程で活潑に行はれる投資活動はどんな性質のものであるか、また景氣のくづれの原因となる過剰投資はどんな性質のものであるか、を明かにした。具體的に云ふとかうである。先づ、過剰投資はどこで起るか、と考へると、一應、消費財産業でも、資本財産業でも、どちらでもよきさうである。實際ツガンはかういふ立場をとつたのであり、英國の恐慌史に於て、十九世紀前半には前の場合が現はれ、後半に入つて後の場合が起つたと考へてゐる。然し乍らシュビイトホフによれば、上昇過程の發端も中心も凡て生産手段生産部門にあるのであつて、過剰生産の典型的な場合と云へば、資本財が過剰で消費財が不足する場合に限るのである。言葉を変へて云へばかうである。「固定的資本設備建設活動が如何なる状況にあるかで凡ては決せられる。好況と不況とを本質的に區別するところのものは、それが増加しつゝあるか否かである。其他一切の現象は隨伴的現象に過ぎぬ。」

(三) 最後に貯蓄學説についてであるが、既述の通り、ツガンでは、貨幣形態に於ける貸付資本が缺乏するため、恐慌が起ると考へられてゐる。恐慌の原因は金融の逼迫に他ならぬのである。シュビイトホフも亦景氣のくづれるとき金融の逼迫が起ることとは勿論否認しない。然し彼は進んで此の現象の背後にあるものを究めようとする。このために彼は、一方に於て、生産部門相互間の不比例がどうして起るか、を「貯蓄學説」の考へ方を實物經濟の世界にもちこむことによつて明かにし、他方に於て貨幣資本の市場の構造を詳細に研究する。さうして、金融の逼迫の基礎には營利資本の缺乏があり、營利資本の缺乏の背後には貯

- 1) Spiethoff, „Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion“, Schmollers Jb. 26 Jg. 1902, SS. 267-270. derselbe, „Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle“, Schmollers Jb. 27 Jg. 1903, SS. 353-355. 其後の研究で此の立場が活用されたことはいふまでもない。
- 2) Spiethoff, „Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion“, a. a. O.

の世界の不比例があることを明かにする。即ち、景氣のくづれの原因となる資本缺乏は、要するに、財の世界に於ける不比例の資本主義的現象形態に他ならぬのである。かやうにして、ツガンでは財貨側の不比例説と貨幣側についての貯蓄學説とは切離されてゐたが、シュビイトホフは此の二つのものを統一することによつて、不比例及び過剰生産の成立する道行を明かにするのである。

シュビイトホフの理論は、ツガンの理論と比較するとき、大體以上のやうに特徴づけることが出来る。以下その内容をそれらの基本命題について詳しく説明しようとするのであるが、こゝでは便宜上第一の點については論及を避ける。シュビイトホフの過剰投資説を理解しその批判を準備することに重點を置きたいと思ふからである。従つてこれから問題とするのは第二第三の點だけである。(註二)

第二の點は、シュビイトホフに於て景氣のくづれの原因としての不比例は如何なる性質のものかと考へられたかに關する。云ひ換へれば、不比例説が過剰投資説に轉化されたことに關する。吾々は此のシュビイトホフに於ける不比例説の過剰投資説への發展を二段に分つて論ずる。先づそれをツガンの不比例説の直接の發展として明かにする(第二節)。此の限りではシュビイトホフはマルクスツガンの表式を説明の手段として利用するのであり、さうして彼は、更にかういふ不比例がどうして成立したかを貯蓄學説で説明するに當つても、此の表式を利用してゐるのである。そこで吾々は第三節では此の過剰生産の成立過程についてのシュビイトホフの説明を紹介する。即ち、第二節では景氣のくづれをもたらす不比例はどんな性質のものであるかを、第三節ではさういふ不比例は如何にして成立したかを、何れもマルクスツガンの表式を利用し乍ら説明するといふ順序になる。然し不比例の性質についての彼の説明はツガンよりも一層複雑である。彼は、更に營利資本と生産資本との區別を

とり入れるから、生産部門間の不比例がシュビイトホフでは「生産資本内部の不比例」として考へられ、また消費財部門の相対的過少生産が「補充財の缺乏」として扱へられることになる。このことは景氣のくづれを「營利資本の缺乏」によつて説明することも密接な關聯を持つてゐる。然し本稿では此の第二段の説明に立入り得ない。

第三の點は過剰生産の成立に關してゐる。シュビイトホフでは此の説明は云はゞ二元的になされ、一方では「貯蓄學說」の考へ方を用ひると共に、他方では「再生産的消費」又は「間接消費」が不連続的性質を有する點が考慮されてゐるが、しかしこゝでは後の説明は度外視して「貯蓄學說」だけに注目したい。<sup>(註二)</sup>シュビイトホフは「貯蓄學說」を實物經濟的に再構成するが、此の場合彼はマルクス・ツガンの表式を利用して、彼の景氣理論の構想が一目でわかるやうに圖式化するのであつて、これによつて彼の理論を理解するのに最も好都合な手懸りが與へられる(第三節)。

よく知られてゐるやうにシュビイトホフの景氣理論は非貨幣的投資過剩説に屬するが、彼が景氣循環の實物經濟的内容をどう考へるかは、以上の、過剰投資説としての不比例説、並びに「貯蓄學說」の實物經濟的構成、によつて明かされる。彼は、景氣のくづれの原因は財の世界に於ける不比例にあり、此の不比例は以上の性質を有し、また以上の如くにして成立する、と考へるわけである。然し資本主義經濟が貨幣經濟である以上、以上のやうな財の世界の不比例は貨幣に覆はれて現象するが、現實に貨幣經濟で現象する景氣の行詰りの現象の背後にかういふ實物經濟的過程があるとどうして考へられるか。最後に此の問題が残るわけである。これを明かにするためには貨幣市場及び資本市場の構造を明かにし、そこで演ぜられる貨幣的現象は財の世界に於ける現象とどう對應す

3) 此の點は續稿「資本不足と過剰生産」第一節で詳論する。

るかを究めなければならぬ。結局に於ては、生産資本内部の不比例が營利資本を缺乏せしめ、營利資本の缺乏が貨幣の缺乏をもたらすことを説明しなければならぬ。此の問題は確かにシュンペイトホフを最も苦しめたものゝ一つであり、彼自身詳しい説明を試みてゐる。然し此の點について彼の詳しい説明を敍べ、これを批判することは續稿の仕事である。

(註一) 我國でもシュンペイトホフについてすぐれた文献が少くない。即ち、靜田均「シュンペイトホフの景氣循環論」(經濟論叢第二九卷) 井行重「景氣理論に於けるシュンペイトホフとハイエク」(經濟論叢第四〇卷) 波多野鼎著「景氣學說批判」第二章「シュンペイトホフの景氣學說」などを擧げ得る。また、シュンペイトホフの景氣理論の彼自身の體系的展開としては、「Handwörterbuch der Staatswissenschaften」4. Aufl. VI. Bd. の論文「Krisen」が有名であるが、これの望月敏之氏の邦譯「景氣理論」(三省堂刊、昭和十一年)は非常な立派なものである。

(註二) シュンペイトホフに於て再生産的消費又は間接消費 (reproduktiver Konsum od. mittelbarer Verbrauch) とは固定設備建造活動を指し、従つてそれに用ひられる財(鐵・石炭・煉瓦・セメント・木材等)は間接消費財と呼ばれる。此の場合建設された固定設備が生産的目的のもの(工場・機械等)であるか、消費的目的のもの(鐵道・住宅・水道・瓦斯・電燈等)であるか、はどちらでもよい、要するに、(1)その利用期間が長いことと、(2)所得で買はれず、資本化された所得、即ち營利資本で買はれること、此の二つの特徴を具へた財を總稱するのである。此等の財は、或は「再生産的消費財」(Güter des reproduktiven Konsums)と呼ばれ、或は「収益財」(Ertragsgüter)と名付けられる。さて上記の間接消費の不連続性は此の収益財の第一の特徴、即ち耐久性の結果である。収益財は耐久的であるから、一度買はば替く買はずとすむ。ところで此等の収益財の需要は不況期間中殆んど現れないが、好況が始まると共に堰を切つて起る。然し此の需要がひとわり満足されると上記の性質によつて需要は跡を絶つ。ここで収益財及び間接消費財の過剰生産が起るといふのである。(Spielhoff, „Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion,“ a. a. O. SS. 226-227. Spielhoffs Rede in der Krisen debate des Vereins für Sozialpolitik, 1903, in „Schriften des Vereins für Sozialpolitik,“ 113 Bd. S. 219. Spielhoff, Artikel „Krisen,“ a. a. O. S. 39, 75, 77. 邦譯 p. 118, 270, 276.) 日本でシュンペイトホフの批判 (La théorie de l'épargne, Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales, 1909, p. 254

4) 續稿「資本不足と過剰生産」第二節以下参照。

(2) がある。それはかうである。(1) 間接消費の減退と資本缺乏とが同時に起ることがシュビイトホフ理論の前提である。然しこの同時性は證明出来ない。(2) 私經濟的には、成程収益財の耐久性はそれに對する需要が間歇的であることの論據となる。然しここに問題なのは國民經濟全體の需要である。さうして此の場合には個人の需要は不連續的にしからずとも、全體としては需要が連續的たり得る。此の意味に於て耐久的であることは國民經濟的需要の不連續性を根據づけ得ない。此のアフタリオンの批評に對して私も同感である。然し乍らシュビイトホフは尙此の論點を重要視してゐるやうである。彼によると資本主義の進むにつれて、景氣のくづれに於て、資本缺乏の影響よりも欲望飽和の影響がより強く現れるといふ。

## 二

景氣上昇の中心をなすものは資本財生産部門であり、景氣のくづれの典型的な場合は、資本財が過剰で消費財が不足する場合である。シュビイトホフはかう主張するが、此の主張は、一方に於て、事實の觀察に立脚するとともに、他方に於て理論的分析によつて根據づけられてゐる<sup>1)</sup>。先づ、此の命題の事實上の根據から説明を進めよう。

此の點について最も好都合な資料を與へるのは一八四〇年以後の獨乙の生産及び消費の發展である。これについて見ると、景氣上昇の中心をなすものは生産手段生産部門であつて、好況を行詰らせるものも此の部門に於ける過剰生産であつた。特に例へば一八四三—四七年の好況の如きは、凶作のため直接消費は非常に減退したけれども、資本財生産はそれにも拘はらず増加を續けたのであつて、好況が直接費に依存せぬことの一つの重要な歴史的事例を與へてゐる<sup>2)</sup>。

此の獨乙の事實は、主として英國の事實に立脚して樹てられたところの「資本主義發達の初期(十九世紀前半の英國)に於ては消費財部門が好況の中心をなす」といふツガンの主張に對して一つの反證を與へる。然し此のツガンの命題は、シュビイトホフによれば、根據が薄弱である。ツガンは、價格及び失業についての統計に基づいてかう主張するが、然し生産及び消費の資料に基づくものでない限り、直ちに承認することは出来ない。成程十九世紀前半の英國では失業は特に纖維工業に多い。然し纖維工業即ち消費財産業ではないし、また纖維工業が特に國外輸出に依存するところ大であるといふ事情も考へねばならぬ。さうする

1) 以下の敘述は主として Spiethoff, „ Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle, ” SS. 345-345. による。  
2) Spiethoff, Artikel „Krisen“, a. a. O. S. 49. 邦譯, p. 160.



と、ツガンの材料だけから、消費財産業が過剰生産の中心点であつたと見るのは輕卒過ぎる。然も種々の資料から見て、十九世紀前半の英國の景氣循環の中心は生産手段生産部門にあつたと推測されるところがあまりにも多いのである。<sup>3)</sup>

然し乍ら此の命題の一層重要な根據は次の理論的主張にある。(1)好況が消費財部門から起つて經濟全體に波及することは考へ得ない。今消費財部門が好況に見舞はれたとしよう。しからばその原因はどこにあるか。その原因は資本の消耗か、或は少くとも貯蓄の部分的消耗にあるであらう。然し乍ら貯蓄が減少すれば、資本財部門の發展はそれだけ阻害される、資本財部門の發展が阻害されれば、景氣上昇はもはや不可能である。之と反對に、資本財生産部門から好況が始まるときは、資本投下の増大がその基礎にあるわけであるから、上昇運動は容易に消費財部門に波及する。<sup>4)</sup>然しシュビイトホフが擧げる論據はそれだけではない。一般に消費財に對する欲望は無限である。さうして好況の間消費財の購買力に缺乏せず、寧ろ豊富である。従つて消費財需要が全體として低下し、そのために消費財の過剰生産が起り、景氣が崩れるとは考へられない。従つて消費財の購買力の側に好況の挫折の原因を求めることは出来ない。それが減退して消費財の過剰生産が起るのは好況が挫折した結果であつて、その原因ではないのである。<sup>5)</sup>

既述の通り、<sup>6)</sup>シュビイトホフはツガンと同様に、またそれと同じ意味で、販路説の立場に立つものである。即ち、景氣のくづれの原因は生産部門相互間の比例が喪はれることにあると見る。従つて景氣のくづれの原因としての生産手段の過剰は反面に於て消費財の不足を意味するものでなければならぬ。此の立場からすると生産手段の過剰といふことゝ消費財の不足といふことゝは同じ事柄の表と裏とに過ぎぬ。然し生産手段の過剰が好況を挫

- 3) 英國の生産指數については最近 Walther Hoffman の有名な研究 (Wachstum und Wachstumsformen der englischen Industrierwirtschaft von 1700 bis zur Gegenwart, Probleme der Weltwirtschaft, Nr. 63, 1940.) があるが、これによると Spiethoff の Tugan 批評は成立つやうである。
- 4) Vgl. auch Spiethoff, Artikel „Krisen“, a. a. O. S. 71. 邦譯 p. 256.

折せしめるといふ主張は一應理解出来るとしても、それが消費財の不足と表裏して現れるといふ主張は直ちに首肯できない。それでは此の點についてシュピイトホフの説明はどうなつてゐるか。此の命題を明かにするため、彼は次の表式を用ひてゐる(第一表参照)。

第一表

I 單純再生産				
第一部門	720p	360 a	360r	= 1,440
第二部門	360p	180 a	180r	= 720
第三部門	360p	180 a	180r	= 720
	1,440	720	720	2,880
II 比例的なる擴張再生産				
第一部門	840p	420 a	420r	= 1,680(+240)
第二部門	420p	210 a	210r	= 840(+120)
第三部門	180p	90 a	90r	= 360(-360)
	1,440	720	720	2,880
III 不比例的なる擴張再生産				
第一部門	1,080p	540 a	540r	= 2,160(+720)
第二部門	180p	90 a	90r	= 360(-360)
第三部門	180p	90 a	90r	= 360(-360)
	1,440	720	720	2,880

ら既に三六〇だけ不足があるが、然しそれだけではなく、生産擴張に必要な勞賃基金も亦不足してゐる。餘剰の生産手段(七二〇)を利用せんが爲には、假定によつて、三六〇だけの消費財が過剰に生産されてゐることが必要で

- 5) 此の最後の論點はいふまでもなく、過少消費説批判を意味するが、Spiethoffの最初の論文 „Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion“, a. a. O. SS. 272-274. では過少消費説の批判としてこのことが一層詳細に論ぜられてゐる。
- 6) 拙稿「販路説の過剰投資説への發展」經濟論叢第五十卷第五號 p. 60.

ある。かくて一方に於て七二〇だけの生産手段の過剰があるのと平行して、他方に於て七二〇だけの勞賃基金の不足がある。シュンペイトホフが景氣のくづれの原因と見る不比例の典型的な場合はかやうな場合である。

此の不比例に於て資本財生産の過剰と消費財生産の不足とが表裏してゐることは、次のやうに考へると理解できる。既述の通り、貯蓄率五〇パーセントの場合、擴張再生産が圓滑に行はれるためには三つの部門の間で「14:3」の比率が維持されねばならぬ。ところで「II」に於ては此の比率が「9:11」になつてゐる。然も、「I」「II」の場合を通じて生産の規模は、全體としては、全く同様に二八八〇の高さを保つてゐる。従つて、かくの如くにして生産部門間の比率が第一部門の側に傾き、第一部門の生産的投資が増加する場合には、第一部門への生産力の増進は第二部門の犠牲に於て行はれねばならぬ。軍全體の戦線にある兵力が不變である場合或る方面の兵力を増強せんとすれば、必然に他の方面の兵力を引上げねばならず、その方面が手薄となると同様である。資本財生産の過剰が消費財生産の不足と表裏するのはこのことの當然の結果である。

以上で明かなやうに、シュンペイトホフの過剰投資説は、景氣のくづれの原因は、その本質に於て、必ず他面に於て消費財部門の過小生産を伴ふところの生産手段生産部門の過剰生産であることを説くものである。更に彼によれば、かくの如き不比例は、國民經濟の組織形態の如何を問はず、つねに過剰生産の原因をなすのである。社會主義經濟に於ても、貨幣なき個人主義的經濟組織の下に於ても、亦資本主義經濟に於ても、不比例は一貫して過剰生産の原因である。<sup>7)</sup>然し乍らくの如き不比例生産は、景氣のくづれの原因の本質にとどまる。それが現實の資本主義經濟に於て現象する形態は寧ろ「營利資本の缺乏」(Mangel an Erwerbskapital)であり、その結果として

7) Spiethoff, „Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt,“ Schmollers Jb. 33 Jg. 1909, SS. 51-56. 尙、此の表式の構造はツガンのそれと同様である。ツガンの表式の構造は既に拙稿「販路説の過剰投資説への發展」でこれを説明したから、ここでは此のシュンペイトホフの表式については特に説明を加へない。8) 前掲拙稿、「販路説の過剰投資説への發展」p. 58.

一般的過剰生産が生じ一般的物價下落が生ずる。<sup>(註)</sup>従つて投資過剰説を餘蘊なく説明しようとするれば、勢ひ、生産部門間の不比例は如何にして營利資本の缺乏に現象するか、また營利資本の缺乏によつて如何にして生産手段の販路梗塞が生ずるか、を説明せねばならぬ。然し乍らここでは此の問題を直ちにとり上げない。蓋しそれは若干の準備的説明を前もつて必要とするからである。ここでは寧ろ以上の説明に直ちに接續する問題を取り上げる。即ち、上記の如き不比例的生産は如何にして成立したかの問題がこれである。シュンピイトホフによれば、此の不比例の成立過程も亦、現實には極めて複雑な貨幣的表現をとつて現はれるけれども、その本質に於て財の世界の事柄なのである。かかる不比例の成立過程を本質的に洞察するためには何よりも貨幣及び信用による複雑化を取去ることが必要である。即ち實物經濟的考察によらねばならぬ。然も彼は此の分析に於ても前と同様にマルクス・ツガンの資本蓄積理論を利用する。此の意味に於て吾々は以上の不比例の性質の説明に引續いて、直ちに次節に於て過剰生産の成立過程についてのシュンピイトホフの説明を見ることとする。ここでも前と同様な理由によつて貨幣及び信用による複雑化は度外視され、ただその實物經濟的内容だけが問題とされるであらう。

(註) 「資本主義經濟 (die freie arbeitsteilige geldwirtschaftliche Ordnung)」ではその他の經濟秩序に比して次の相違が表はれる。社會主義經濟に於ては指導者の誤算から不比例が起つても社會的生產はそれにも拘らず不變であり、従つて欲望満足は凡てに亘つて不變であるが、資本主義社會ではさうは行かない、また自然經濟に於ては不比例が起つた場合過剰生産者の需要が増加し、過剰生産者の需要が減少し欲望満足のシソーラが起るだけで全體としての消費は不變であるが、資本主義經濟ではさうは行かない、寧ろ一般的悪化 (eine allgemeine Schlechterung) が起る。然し乍ら財の世界に於ける内部關係は凡ての經濟秩序を通じて同一である。ただ資本主義經濟では、補充財に基礎を置くところの營利資本が缺乏する。本來ならば此の營利資本は過剰な生産手段の生産者にその代價として渡され、更に生産手段の利用に必要な補充財を買取らしむべき筈のものであるが、その營利資

9) 此の注目すべき主張については、Spiethoff, „Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt“, a. a. O. SS. 43-48. derselbe, Artikel, „Krisen“, a. a. O. SS. 81-82. 邦譯 pp. 290-293. で詳しい説明がなされてゐる。

本が缺乏するのである。<sup>10)</sup>尙此の點は續稿で詳論する。

## 三

然らば過剰生産は如何にして成立するか。いふまでもなく景氣上昇過程は生産手段生産部門に於ける活潑なる投資活動によつて特徴づけられ、更にその理由の一つとして、例へば懷妊期間の原理の如きが挙げられるであらう。然し乍らそのことは、それ自體としては、資本財部門の投資活動が急激に進行することを説明するにしても然し過度に進行することを説明するものではない。何よりも不比例の成立が説明されねばならぬ。然しながら一見したところ景氣上昇過程に於て不比例は、單にその末期に於てのみ現れるのではなく、寧ろ上昇期間を通じて存在する如くである。現に資本財生産はその時々貯蓄を遙かに上廻るのである。従つて若し不比例を單純に景氣のくづれの原因と解するならば、好況は常に隣時にして崩壊し去る他ない筈である。然らば好況が相當の期間持續して然る後行詰るのは何故であるか。好況を存続せしめる力、そしてその力の枯渴と共に好況が挫折せざるを得ぬところの力は何であるか。これがここに不比例の成立過程の問題と呼ぶものの内容である。

此の問題は既述の通り<sup>11)</sup>ツガンに於ては殆んど全く不問に附せられ、シユピイトホフで始めて取上げられたものであるが、しかし、此の問題の解決に當つてシユピイトホフはツガンの「貯蓄學說」の構想を利用したのである。「貯蓄學說」はツガンでは單に貨幣資本の市場に於ける隆替に關するだけのものに過ぎなかつた。此の考へ方を財の世界にまでとり入れて考へることによつて、シユピイトホフは上記の問題を解決しようとするのである。

此の觀點からしてシユピイトホフはツガンの貯蓄學說を次のやうに批評してゐる。

10) Spiethoff, „Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt“, a. a. O. S. 48.

「ツガンは資本在荷及び資本の枯涸 (die Kapitalvorrate und die Kapitalabsorption) の因子を或は否定し或は一面的にしか考慮しなかつたが、私は此の要素をもつと立入つて考へて見たいと思ふ。——景氣上昇が、自由な、投下を求める資本にどう依存するか、を考へようとする、次のやうな具體的財貨の關係が表はれて來るであらう。先づ上昇の初めには遊休資本財の大きな在荷(そのうち少くとも可成の部分は消費財から成立してゐる)があり、時が経つにつれてそれは生産設備の建設のために投下せられる。ところで生産手段の需要が斯様に増大すると生産の不比例(生産手段生産の過大)が好況の徴候として現はれるに到るが、然し不況期から持越された資本財が均衡を維持するに充分なだけ残つてゐる間は、此の不比例に耐えることができる。然しそれが不可能となり在荷が使ひ盡されると、生産手段生産者はその生産をもと断り賣却することが出来なくなる。蓋しその需要は資本財在荷から出て來るが、その源泉が既に枯涸してしまつたからである。更に販賣不能の結果生産に必要な資本財を買入れることが出来ぬため、生産手段生産者をも通りの生産を続けようとしても續けることが出来ぬことになる。……ツガンは生産の比例的配分の下に於ける資本の擴張再生産の表式を與へたが、若しこれによつて景氣上昇期間中演ぜられる過程の寫眞を與へようとすれば、それは次のやうに改められねばなるまい。即ち生産手段及び労働者消費財の年々の生産數量は單に『そのうち生産に使用された部分』プラス『前年度利潤の蓄積部分』に一致せしめる(ツガンの如く)だけでは不充分であつて、更にそれに『これまで遊休状態にあり、いま新に生産に投ぜられる資本數量』を加へたものに等しからしめねばならぬ。生産手段生産は該年度の資本形成を超えるといふ意味に於ては、既に好況中に於ても不比例的生産が現はれるけれども、然し遊休資本からの補給があるために生産の比例性が人為的に維持される。しかしかかる状態がしばらく續いてこれまで存在した此の遊休資本數量が最早補給し得なくなつたにも拘はらず、生産手段生産の構へは依然として前と同様に此の補給があるやうな形をとつてゐるならば、これまでの人為的技術的比例性は不比例性に轉化し、過剰生産が現はれる。」

恰も此の言葉に應ずるかのやうに、シュビイトホフは「沈滞及び好況の經過に於て資本の形成・堆積・投下の現象及びそれと財の世界との關係は圖式的にはどう考へられるか」を示し、以て「資本缺乏とは何か、またそれは過剰生産と如何なる關係を有するか、を明かにすべく」マルクス及びツガンにならつて彼自身新しい再生産表式をつくり上げた。沈滞期間中つきつきに堆積されて行つた資本在荷が、好況の開始と共に漸次生産過程に吸収

1) 前掲拙稿「販路説の過剰投資説への發展」 p. 62.  
 2) Spiethoff, „Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Poble“, a. a. O. SS. 350-353.

されて行き、その枯渴と共に遂に不比例が顯現する過程(言葉を換へて云へば、實物經濟的貯蓄觀點の内容)は此の表式によつて最もよく察知出来るから、次にこれを掲げよう。<sup>3)</sup>(第二表参照)

## 第 二 表

第 一 年 度	第 一 部 門	840 p	420 a	420r = 1,680 (+240)
	第 二 部 門	420 p	210 a	210r = 840 (+120)
	第 三 部 門	180 p	90 a	90r = 360 (-360)
		1,440	720	720 = 2,880
第 二 年 度 (第 一 不 況 年 度)	第 一 部 門	375.0 (+ 35.0)	437.50 (+ 17.50)	437.50 = 1,750.00(+250.00)
	第 二 部 門	437.5 (+ 17.5)	218.75 (+ 8.75)	218.00 = 875.00(+125.00)
	第 三 部 門	187.5 (+ 7.5)	93.75 (+ 3.75)	93.75 = 375.00(-375.00)
		1,500.00	750.00	750.00 = 3,000.00
第 三 年 度 (第 二 不 況 年 度)	第 一 部 門	911.48 (+ 36.48)	455.74 (+ 18.24)	455.74 = 1,822.96(+260.40)
	第 二 部 門	455.72 (+ 18.22)	227.86 (+ 9.11)	227.86 = 911.44(+ 30.18)
	第 三 部 門	195.30 (+ 7.80)	97.65 (+ 3.80)	97.65 = 390.60(-390.60)
		1,562.50	781.25	781.25 = 3,125.00
第 四 年 度 (第 三 不 況 年 度)	第 一 部 門	949.48 (+ 38.00)	474.74 (+ 19.00)	474.74 = 1,898.96(+271.40)
	第 二 部 門	474.72 (+ 19.00)	237.36 (+ 9.50)	237.36 = 949.94(+135.60)
	第 三 部 門	203.30 (+ 8.00)	101.65 (+ 4.00)	101.65 = 406.60(-407.16)
		1,627.50	812.75	812.75 = 3,255.00
第 五 年 度 (第 一 好 況 年 度)	第 一 部 門	1,107.86 (+158.37)	553.87 (+ 79.18)	553.87 = 2,215.70(+316.74)
	第 二 部 門	553.91 (+ 79.19)	276.82 (+ 39.66)	276.82 = 1,107.82(+158.82)
	第 三 部 門	287.20 (+ 33.90)	118.65 (+ 17.00)	118.65 = 474.40(-475.04)
		1,898.86	949.44	949.44

3) Spiethoff, "Der Kapitalmangel im seinem Verhältnisse zur Gitterwelt", a. a. O. SS. 51. 60.

第六年度 (第二好況年度)	第一部門	1,455.70 (+347.70)	727.85 (+173.85)	727.85 = 2,911.4 (+416.40)
	第二部門	727.80 (+173.80)	363.80 (+ 86.80)	363.80 = 1,455.6 (+208.10)
	第三部門	311.50 (+ 74.50)	155.75 (+ 37.25)	155.75 = 623.0 (-624.50)
		2,495.00	1,247.50	1,247.50 = 4,990.0
第七年度 (第三好況年度)	第一部門	1,862.0 (+406.0)	931.0 (+203.0)	931.0 = 3,724.0 (+522.0)
	第二部門	931.0 (+203.0)	465.5 (+101.5)	465.5 = 1,862.0 (+206.0)
	第三部門	399.0 (+ 87.0)	199.5 (+ 43.5)	199.5 = 798.0 (-798.0)
		3,192.0	1,596.0	1,596.0 = 6,384.0
第八年度 (普通年度)	第一部門	2,304.0 (+332.0)	1,197.0 (+266.0)	1,197.0 = 4,788.0 (+1,034.0)
	第二部門	931.0	465.5	465.5 = 1,862.0
	第三部門	399.0	199.5	199.5 = 798.0 (-1,034.0)

此の第二表の構造を明かならしめるために、これまで屢々用ひた記號を用ひよう。即ち  $P_i(t)$ ,  $a_i(t)$ ,  $r_i(t)$  を以て第  $i$  部門の第  $t$  年の生産手段價值、勞賃、利潤を表し、 $w_i(t)$  を以て第  $i$  部門の第  $t$  年度の生産物價值を表すこととする。さうすると先づ (1)  $P_i(t) + a_i(t) + r_i(t) = w_i(t)$  なることは  $S_t$  までもな  $S_t$ 。更に (2)  $P_i(t) : a_i(t) : r_i(t) = 2 : 1 : 1$  であることも、また貯蓄はただ利潤だけから行はれ、然もその五〇パーセントに等しいこと、即ち、

(3)  $\sum_i r_i(t) - w_i(t) = 1/2 \sum_i r_i(t)$  なることも凡ての年度を通じて假定される。然し乍らここでは、ツガンと異つて、年々の生産的投資——精確に云ふと、生産擴張のための投下資本の増加——は、第三表の最初の欄で示されるやうな形をとつて、變化することが前以つて前提され、此の投下資本の變動に基いて經濟變動過程のモデルが、現實の景氣循環に似せて、つくられるのである。此の場合投資活動の變動は、切の經濟變動の根本原因をなすわけであるが、ここでは此の變動は吾々の當面の問題にとつて所與と看做される。即ち投資活動は沈滞期間に



衰へ好況期間中活潑となるが、吾々はその理由をしばらく度外視して、好況期間中活潑となつた投資活動が結局行詰るのは何故であるか、ただそれだけをここで問題とするのである。ところでかくの如き投資活動の盛衰に拘

第三表

年 度	生産的投資 <sup>(1)</sup>		資 本 形 成	資本在荷 <sup>(2)</sup>	
	p	a		p	a
1	—	—	360.00	—	—
2	60.00	30.00	375.00	180.00	90.00
3	62.50	31.25	390.00	367.50	183.75
4	65.00	32.50	407.15	562.50	281.25
5	271.46	135.00	475.00	562.00	281.00
6	596.00	298.00	624.50	280.00	140.00
7	696.00	348.00	798.00	0.00	0.00
8	532.00	266.00	—	—	—

[注意] (1) 此の生産的投資は、第2—7年度に於ては各部門間に14:7:3の比率で按分せられ、第8年度にはただ第一部門のみに向けらる。  
 (2) ここに所謂「資本在荷」は(前年度の資本在荷)+(前年度の資本形成)-(今年度の生産的投資)を意味する。

はりなく貯蓄活動は恒続的な歩調を以て進行する。此の結果として、沈滞期間中であつては、年々の貯蓄によつて形成された資本にして投下されざるものが、實物資本の形態に於て、堆積されることとなる。第三表の最後の欄に示された資本在荷がこれであつて、此の資本在荷によつて好況は準備されるのである。

此の資本在荷をとり入れたところにシュンピイトホフの表式(第二表)の特徴があることは上記によつて明かである。最初沈滞期間中投資活動が萎靡したため堆積された資本在荷は、好況が始まると共に投資活動が盛となるにつれて、動員され生産過程に投下されるに到るが、投資活動が好況

の進行に伴つて愈々活潑を加へるやうになると、漸次減少し最後には枯渇するやうになる。シュンピイトホフが景氣上昇過程を“1. Anstieg”、“2. Anstieg”、“Hochschwung”、“Kapitalmangel”の四つに分つたことはよく知られてゐるが、第五年度以降の數字は此の四つの段階の核心をなす事態を表式化したものである。此の場合に於

4) Spiethoff, „Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion” a. a. O. SS. 276-278. derselbe, Artikel „Krisen“, a. a. O. S. 24. (邦譯, pp. 61-62.)

て資本在荷が有つ役割が如何なるものであるかは、好況の進行の途中に於て生産の比例性が失はれた場合を考へれば明かとなる。上の表式では、第八年度以外の年度では、生産部門相互間の比率は一四、七、三の正しい大きに保たれることとなつてゐるが、假に今第五年度に於て此の比率が守られなかつたとしよう。然し此の比例性の攪亂にも拘はらず、第六年度に於ては、資本在荷の側の事情が許す限りに於て、擴大された規模に於ける再生産が任意の形に於て營まれ得るのである。何故かなれば、このために必要な生産手段及び消費財は適宜資本在荷より汲出し得るからである。事態は持駒を充分に持つてゐる將基指しのそれに似てゐる。如何に苛酷な敵の攻撃に對しても、如何なる戦線の攪亂にも拘はらず、彼は豫備隊の動員によつて自らの戦線を樹て直すことが出来るのである。然し乍ら資本在荷が枯渴した場合には明かにこのことは不可能となる。生産部門間の不比例を矯正して擴大再生産を續行する可能性は失はれ、好況は遂に挫折せざるを得ぬこととなるのである。以上をシュピイトホフ自身の言葉で要約すれば次の通りである。「上昇の始め、または沈滞の期間中と雖も完全なる比例性が維持されてゐるわけではないが、然し此等の期間中は、資本が完全に利用し悉されず、常にその一部が遊休状態にあるため、不比例は意義を持つに到らぬ。資本在荷が缺乏するに到つて始めて不比例が顯著に現れるに到る<sup>5)</sup>。」

かくの如くにして第八年度は資本在荷の枯渴の結果不比例は最早隠蔽し得ざるに到る。第八年度に於ける生産的投資は第一部門に對してのみ行はれるが、既述の通りその原因を明かにすることはここでの問題ではない。ここではただ、そのために生じた不比例が資本在荷を使ひはしたため最早收拾し得ざるに到り、その結果再生産の規模の擴大が不可能となることだけが重要である。かくて今や蔽ひ得ざるものとして現象するところの不比例は、第一表に於て明かにしたものとその性質を同じうする。即ちここでも過剰と缺乏とが同時に起る。一見した

5) Spiethoff, „Der Kapitalmangel in seinem Verhältniss zur Güterwelt,“ a. a. O. S. 49. Vgl. auch Spiethoffs Rede in der Krisen-debatte des Vereins für Sozialpolitik, Sept. 1903. (Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 113, S. 221.)

ところ此の二つの場合には若干の相違があるかに見える。即ち第一表Ⅲの場合には生産手段生産が資本形成に對して既に過剰であるのに、此の第八年度の數字に於ては此の過剰は存しないのである。然し乍ら此の相違は全く副次的に過ぎぬ。此の第八年度の數字に於ては第二部門は翌年度に繰越されて生産擴張に資せらるべき過剰生産物を全然有しない。第一部門の過剰生産物一〇六四を利用して生産を擴張せんがためには、新たに五三二の勞賃基金が必要となるに拘はらず、それに遂に生産されず、而してその他の給源は今や杜絶されたのである。生産手段は貯蓄によつて買はれるとしても、補充財の缺乏の故にそれは利用し得ず、遊ぶ他はない。此の意味に於て此の生産手段は過剰である。シュビイトホフの有名な譬喩を用ふれば、片方のなくなつた手袋と同様に過剰である。此の第八年度に於ても、過剰と缺乏とが同時に現れることは、第一表Ⅲの場合と本質的に全く同様なのである。しかしシュビイトホフの議論は更に一步を進める。以上に見た限りでは、此の第八年度に於ては生産手段の販路梗塞は生じないかに見える。貯蓄が充分であるからである。然し乍らシュビイトホフによれば此の場合に於ても生産手段は販賣不能に陥る。蓋し、補充財の缺乏によつて營利資本の缺乏を生じ、營利資本の缺乏は生産手段の販路の缺乏を意味するからである。寧ろシュビイトホフはかう主張する。貨幣經濟で購買力ある需要が不足するのは營利資本の不足によつてである。従つて勞働者消費財が實際に缺乏してゐても、貨幣經濟ではそれがあるがままに把えることは出来ない。自由な貨幣經濟で生産手段の販賣不能によつてすぐわかるのは營利資本の缺乏 (Fehlen von Erwerbskapital) だけである。然し乍ら今眼を据えて實物形態に於ける財の世界を見透すならばそこには亦補充財の實物形態に於ける缺乏 (Fehlen von materiellen Bedürfnisgegenständen) も現はれて来る。然らば此の主張の論據はどこに存するか。またそれはどう見らるべきであるか。後日吾々は此の問題を詳論するであらう。

6) Spiethoff, „Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt,“ a. a. O. S. 56, SS. 42-49. derselbe, Artikel „Krisen“, a. a. O. SS. 81-82. 邦譯 pp. 291-293.